

中高年齢者の再就職とキャリア選択

法政大学キャリアデザイン学部教授 八幡成美

この間のリストラで正社員採用を抑制してきたこともあって、若年後継者の育成の遅れが目立っており、団塊世代が定年を迎える3年後には、そのような分野でトラブルが発生するのではないかと危惧されている。これは製造現場の話だけではなく、システム部門でもその危惧が顕在化しつつある。60年代から70年代にかけて多くの分野にコンピュータシステムが導入されたが、当時から大型汎用機などの基幹系システムの開発・保守に従事してきたのはコンピュータ第一世代でもある団塊世代であり、彼らが引退するとそれまで蓄積されてきたノウハウが継承されずに、基幹系システムの維持も困難になる。

このように技術・技能の継承が遅れている分野では、団塊世代が定年後にも現役として現場を支え続けたり、若手を育成する役割が期待されている。しかしながら、このような役回りに回れる人数はおのずと限られるだろう。

多数派は年金収入だけでは生活を維持することが難しいので、定年退職後にも何らかの形で働き続けることになる。その際に、職場は変わってもこれまでのキャリアを生かして似たような仕事に従事できることが、高齢者にとっては最も適応しやすい。ここで似たような仕事というのは多くの側面から

見て、今までと類似性が高いということで、仕事に求められる能力・役割機能に重なるものが多いことを意味している。

一見、全く異なる職種であっても、対人折衝能力といった求められる能力に共通する部分があれば、以前のキャリアを生かせる仕事は少なくない。これは、趣味を生かした再就職といったものも広い意味ではキャリアを生かしていることになる。

このように前職のキャリアとの重なりを重視する考え方とは異なり、「定年後は第2の人生への再スタートであるので、むしろ今まで全く経験したことのない仕事を経験してみたい」と、新しいことに挑戦することで、生きがいを見つけようとの考え方もある。飲食業で働いた経験が全くないような人がラーメン屋を開業するといった例だが、習熟には多少時間がかかるだろうが、好きなら必ず成就できるだろう。むしろ、このような自立的キャリア選択は自分でも気づいていなかった隠れた才能を引き出すことにもなる。

定年後に、田舎に戻って農業に従事したり、生業的な自営業をはじめるといったスローライフ型の就業スタイルを選択するケースもある。収入は二の次と言っても、働くからにはつねに実社会とのつながりがあるので、いざという



ときには今までのキャリア経験や人的ネットワークがものをいう。ボランティア活動でも経験を生かして期待された役割を十二分に果たすことで、まわりの見方は大きく違ってくる。他人にはないその人独自のノウハウ、技術・技能に光るものがあるから尊敬されるし、本人もやりがいを感じることができる。ラーメン屋を開業したとしても簿記の知識や顧客満足度を高めるための経営ノウハウがなければ、経営を維持していくのすら難しいであろう。

このように、定年後のキャリアの選択肢は多いが、結局は本人にとってQOL (Quality of Life) を高める生涯キャリアの選択となっているかどうか重要である。現実の社会は甘くはないので、普段から自分自身を鍛え磨く努力を続けておくことから、自分らしい生き方が見えてくるものだろう。